研　　究

子どもの問題行動と母親の夫婦間調整が 1 年後の父親の育児行動に与える影響

加藤　道代[1)]，神谷　哲司[2)]

〔論文要旨〕

子どもの問題行動が 1 年後の父親の育児行動に与える直接的な影響，および，母親のコペアレンティング調整行動（父親の育児への促進，批判）の媒介作用を検討した。2 回の調査に協力した 1,294 組（初回時，第一子が 2-17 歳の夫婦）のデータを分析した。その結果，父親の認知する子どもの問題行動の高さには 1 年後の父親の育児行動を有意に低減する影響がみられた。一方，母親の認知した子どもの問題行動の高さは，母親から父親に対する批判の高さに関連したが，批判から 1 年後の父親の育児行動への影響は極めて低かった。これに対して，母親の認知した子どもの問題行動と促進の関連は極めて低いものの，母親による父親の育児への促進は 1 年後の父親の育児行動の高さを予測した。今後は，母親による父親の育児への促進に関連する背景要因の検討が求められる。また，子どもの育てにくさを感じる親に寄り添う支援は，子育て家族のダイナミクスを踏まえた総合的な家族支援として提供される必要がある。

Key words：子育て，夫婦，コペアレンティング，子どもの問題行動，家族システム

Ⅰ．目　　的

養育態度や養育行動など，親による子どもへの働きかけが子どもの内在化問題行動（不安，抑うつ，心身症状など）や外在化問題行動（攻撃的行動，多動や不注意など）に影響を与えることが繰り返し示されてきた[1,2)]。これに対して，子どもの内在化・外在化問題行動が親子関係に影響を与えているという結果も示されている[3)]。

子どもの特性が親のペアレンティング（養育）に影響を与えるというモデルは，以前から提案されており[4)]必ずしも新しいわけではない。平田[5)]は，子どもの外在化問題行動の高さは，母親の育児負担感，社会的活動の制限，子どもに対する否定的な感情の高さとの間に関連があることを示している。また，障害幼児の感情統制困難等の問題行動と母親のストレスの関連[6)]や，発達障害児の保護者が定型発達児の保護者に比して，肯定的働きかけや相談・つきそい行動が低く，叱責や育てにくさ，対応の難しさが高いこと[7)]も報告されている。これらは，親の存在を子どもの発達環境と考える視点に対して，子どもの特性を親の子育て環境ととらえる視点と言える。

ところで，従来の子育て研究は，研究者が「親（保護者）」を対象としている場合であっても結果的に母親の回答結果であることが多い。これに対して，海外の研究では父親と母親がともに行う養育行動，すなわち，コペアレンティングをとりあげて，父母双方を対象に子どもの気質との関連を検討し，扱いやすい子どもではポジティブなコペアレンティングがより高く，扱いにくい子どもではより低いことを示している[8,9)]。

Effects of Children's Behavioural Problems and Mothers' Coparental Regulation on Fathers' Childcare Involvement One Year Later
Michiyo Kato, Tetsuji Kamiya
〔JCH-22-029〕
受付 22. 4.15
採用 22.11.29
1）東北大学名誉教授（研究職/公認心理師/臨床心理士）
2）東北大学大学院教育学研究科（研究職/公認心理師/臨床発達心理士）

Presented by Medical*Online

コペアレンティングは，「両親が親としての役割をどのように一緒に行うかということ」[10]，さらに，広くは「その子どもの世話と養育に責任を負うべき複数の養育者が共有する行為」[11]と定義され，協力的なコペアレンティング行動と阻害的コペアレンティング行動の2側面からとらえられることが多い[12,13]。互いのペアレンティングに価値をおき一緒に子どもに対応する際に調和的であれば，協力的なコペアレンティング関係である。しかし，相手の子育てを批判し軽視することは，阻害的なコペアレンティング関係となる。

わが国の子育てにおいては母親が主要な養育者（プライマリー・ケアギバー）であることが圧倒的に多い。このため，夫婦によるコペアレンティングには母親から父親への調整行動が見逃せない。加藤・黒澤・神谷[14]は，母親による父親の育児行動への調整行動として母親から父親への“促進”と“批判”に注目し，母親が父親の子育てを促進し支持的に働きかけるほど父親の育児関与，育児協働感，夫婦関係満足は高く，母親から父親への批判が高いほど育児協働感，夫婦関係満足は低いことを示した。

加えて，加藤・神谷[15]では，母親の回答する子どもの外在化問題行動ならびに父親の育児関与が，同じく母親の回答する母親による父親への調整行動を介して，父親が回答する父親自身の育児関与に及ぼす影響を検討した。その結果，母親が子どもの外在化問題行動を高く認知するほど母親による父親への促進は低く，批判は高かった。さらに，母親による促進が高いほど父親が回答する自身の育児関与は高く，それを母親が高く認知するほど父親の育児に対する促進が高く批判が低いという父母間の循環プロセスの存在が認められた。一方，母親の批判は，父親の回答する自身の育児関与には必ずしも有効に作用しないことも示唆された。したがって，母親中心となりがちなわが国の子育てにおいて父親の育児関与を考えるには，子どもの特性を踏まえつつ子育てをとりまく父母間の相互作用を理解する必要がある。この点について，加藤・神谷[15]では，母親の育児環境として子どもと父親の行動が検討されたが，父親の育児環境については未だ着目されていない。

そこで，本研究は，父親にとっての育児環境として父親の回答する子どもの行動と母親の行動をとりあげた。特に母親が父親に対してどう調整し，それを父親がどのように受け止めているかに留意し，育児をめぐる父母間相互作用の認知を含めて父親の育児行動に与える影響を検討した。

具体的には，父親の育児行動につながる2つの経路を含めた仮説モデルの縦断的検証を行った。経路のひとつは，父親の回答する子どもの問題行動（内在化問題行動/外在化問題行動）が1年後の父親の育児行動につながる直接経路である。もうひとつは，母親が回答する子どもの問題行動が父親と母親間のコペアレンティング調整（母親から父親への促進や批判（母親回答）と，その母親の行動に対する父親の認知（父親回答））を媒介として，最終的には1年後の父親の育児行動に影響を与えるという間接経路の想定である。父母ペアの回答および縦断調査を用いることにより，家族システムにおいて子どもと母親の行動がどのように父親の育児行動を予測するかを検討した。また，本研究は，第一子の年齢2-3歳，7-8歳，13-14歳，16-17歳群に統制した夫婦ペアを研究対象者としたため，幅広い子育て期にまたがっていることを勘案して，補足的に，子ども年齢差についても確認した。

なお，本研究は，加藤・神谷[15]において使われたデータの一部，母親回答による「子どもの外在化問題行動」，「母親から父親への促進」，「母親から父親への批判」を再利用し，あらたに母親回答による「子どもの内在化問題行動」，父親回答による「子どもの内在化問題行動」および「外在化問題行動」，「母親から自分への促進」および「批判」，1年後の父親回答による「育児行動」の変数を加えて縦断研究とした。また，加藤・神谷[15]には父親の育児関与を1項目で尋ねたという限界があったが，本研究では育児行動尺度を複数項目で作成し父親の育児行動を精緻化した。以上，本研究は，加藤・神谷[15]とは異なる仮説モデルの検証が目的であったことを付言する。

Ⅱ．対象と方法

1．調査手続きと研究対象者

本調査では，夫婦ペアを対象とすること，第一子の年齢を統制すること，全国からデータを収集し地域差を排除することから，十分なサンプル数を確保する必要があった。そこで，これらの条件を満たすために（株）クロスマーケティングのリサーチ専門データベースの登録モニターに対するweb調査を行った。第一子の年齢による4群（2-3歳，7-8歳，13-14歳，16-17歳，以下，第一子年齢群とする）について均等割付を行い，

Presented by Medical*Online

配偶者の協力を得られることを条件に回答を依頼した。1 回目の調査は 2014 年 10 月 17 日-22 日に実施した。その際に追跡調査への協力の可否を尋ね，了解の得られた研究対象者にのみ，2015 年 11 月 12 日-30 日に 2 回目の調査を行った。調査に協力してくれた回答者には調査会社からモニターポイントが付与された。ネット調査でペアの回答を求めるにあたり，なりすまし回答を防止する対策として，①調査依頼時に「配偶者への質問と回答は見ないこと」，「代理でなく本人が答えること」，「相談や意見交換をおこなわないこと」を明示し，②父親→母親，母親→父親への回答交替の際には交替を示し，途中での回答の保存を可能とし，③先に回答した性別，交替後の性別が同じデータは分析対象外とし，④交替後の全ての質問画面に「母親（父親）の方が回答してください」と表示することによって，随時注意を喚起した。

1 回目の調査では 2,424 組のデータが収集されクリーニングの後 2,328 組のデータが有効とされた。そのうち 2 回目の調査の依頼に同意を得た 2,249 組を対象に 2015 年に 2 回目の追跡調査を行い，1,294 組から回答を得た（回収率 57.5%）。第一子の年齢群による内訳は，2-3 歳 273 組，7-8 歳 348 組，13-14 歳 334 組，16-17 歳 339 組であった。

2. 測度

i．夫婦ペアレンティング調整尺度（1 回目の調査の回答）

父親による育児に対して母親はどのように対応し調整するのか，および，母親からの調整を父親がどう認知しているのかを測定するために，夫婦ペアレンティング調整尺度[14]を用いて母親および父親から回答を得た。この尺度は，母親による父親の育児行動への支持，尊重，激励を中心とした促進行動 9 項目（例：母親用「夫に相手をしてもらっていることで，子どもがとても喜んでいると夫に伝える」，父親用「（妻は）あなたに相手をしてもらっていることで，子どもがとても喜んでいるとあなたに伝える」）と，拒否，非難を中心とした批判行動 7 項目（例：母親用「夫がやっていることを取り上げて，自分のやり方でやる」，父親用「（妻は）あなたがやっていることを取り上げて，自分のやり方でやる」）の 2 下位尺度から構成されており，“1. まったくない～6. いつもある”の 6 件法で回答を得た。促進項目と批判項目は，それぞれ合計し項目数で除した値を算出し，促進得点と批判得点とした。高得点ほど，母親の促進あるいは批判に対する母親および父親の認知が高いことを示す。

ii．SDQ（Strength and Difficulties Questionnaire）（1 回目の調査の回答）

子どもの行動上の問題を測定するために SDQ[16]を用いて母親および父親から回答を得た。SDQ は，CBCL（子どもの行動チェックリスト）との相関が高く[17]，日本においても子どもの問題行動のスクリーニングとしての有効性が報告されている[18]。本研究では 2-4 歳用と 4-17 歳用の保護者版を用い，“0. あてはまらない～2. あてはまる”の 3 件法で回答を求めた。行為，多動・不注意，情緒，仲間関係，向社会性の 5 下位尺度のうち，外在化問題行動得点は，行為と多動・不注意の計 10 項目，内在化問題行動得点は，情緒と仲間関係の計 10 項目について，それぞれ合計し項目数で除した値とした。高得点であるほど，母親が認知する子どもの外在化問題行動の程度が高いことを示す。

iii．父親による育児行動（2 回目の調査の回答）

父親自身の育児に関する尺度は，“一緒に入浴する”，“一緒に遊ぶ”など，乳幼児期の子育て用に作成されたものが多い。本調査では幅広い年齢の子どもへの関与を同一尺度で測定し得る項目が必要であったため，平田[19]から 2 項目（「子どもと一緒に（買い物，食事，散歩など）出かける」，「子どもが失敗したときになぐさめる」），森下[20]から 2 項目（「子どもと食事を共にする」，「子どもとおしゃべりする」），ならびに，独自の 1 項目（「子どもがやろうとすることを応援する」）とした。これらの項目について，“1. まったくかかわっていない～6. いつもかかわっている”の 6 件法で 5 項目の加算平均を育児行動得点とした（Cronbach's α =.90）。高得点であるほど，父親はかかわりが多いと認識していることを示す。なお，加藤・神谷[15]が用いた父親の育児関与 1 項目を本調査でも尋ね，Pearson の積率相関係数を用いて両者の相関を確認したところ，r=.69（p<.001）であった。

iv．フェイスシート（1 回目の調査の回答）

回答者と配偶者の年齢，職業，就業形態，結婚歴，家族形態，居住形態，子どもの年齢・子どもの性別を尋ねた。

3. 倫理的配慮

本研究の実施について東北大学大学院教育学研究科

Presented by Medical*Online

の倫理審査委員会による承認を得た（承認番号 13-1-002 および 14-1-003）。調査は無記名方式であり，回答の中断を可能とした。インフォームド・コンセントは調査会社とモニターの間で行われるとともに本調査の web 画面上でも説明が表示され，回答をもって同意とした。web 調査はパスワードで管理され，アクセスと入力はひとり 1 回に制限し，回答のコピーや印刷ができないように設定した。したがって，回収調査票は作成されず研究者においては回答者個人を特定できないため回答の匿名性は担保されたと言える。

4. 著者と共著者の分担

加藤は研究構想と分析計画および執筆，神谷は調査実施管理および分析を担当し，結果の考察を含むすべての研究段階における議論は両者で行った。神谷は本論文最終版を承認し，加藤とともに本論文のあらゆる面への説明責任を負うことに同意した。

5. 本分析前の確認分析

1 回目の調査で翌年の調査への協力が得られた 2,328 名を対象に，2 回目の調査で協力が得られた群と協力が得られなかった群の間（「協力の有無」と記す）に背景となる情報の違いがあるか確認するために，以下の検討を行った。まず，第一子の年齢群 4 群と協力の有無のクロス集計表では $\chi^2(df=3)=24.55$, $p<.001$ で有意であり，調整された残差を確認したところ 2-3 歳の群は協力の無かった群が協力の有った群よりも多く（$p<.01$），7-8 歳の群では協力の有った群が協力の無かった群よりも多かった（$p<.05$）。つぎに，妻の年齢，夫の年齢，子どもの人数，結婚してからの年数をそれぞれ従属変数とし，協力の有無を独立変数とする多変量分散分析を行った。結果，妻の年齢では協力の有った群平均：$M=40.97$（標準偏差：$SD=5.83$）歳，協力の無かった群 $M=39.84$（$SD=6.34$）歳で F（$df=1$, 2,326）$=19.94$, $p<.001$, $\eta^2_p=.01$，夫の年齢では協力の有った群 $M=43.48$（$SD=6.47$）歳，協力の無かった群 $M=42.12$（$SD=7.03$）歳で F（1, 2,326）$=23.55$, $p<.001$, $\eta^2_p=.01$，子どもの人数では協力の有った群 $M=1.76$（$SD=0.68$），協力の無かった群 $M=1.68$（$SD=0.68$）で F（1, 2,326）$=7.06$, $p<.01$, $\eta^2_p=.00$，結婚年数では協力の有った群 $M=12.91$（$SD=5.65$），協力の無かった群 $M=11.97$（$SD=5.91$）で F（1, 2,326）$=15.42$, $p<.001$, $\eta^2_p=.01$ であった。いずれも有意ではあったが効果量は極めて小さく大きな差異は認めなかった。また，2 回目の調査への協力の有無と就業形態とのクロス集計表では，妻で χ^2（2）$=0.376$，夫で χ^2（2）$=0.162$，家族形態と居住形態の妻回答では，家族形態で χ^2（1）$=1.66$，居住形態で χ^2（1）$=0.227$ で有意差はなかった。以上，2 回目の調査において協力の有った群に著しい偏りがないことを確認した後，回収したデータによるその後の分析を進めた。

分析の対象とした 1,294 組の 1 回目の調査時のフェイスシートの情報はつぎの通りである。母親の年齢：21-63 歳（$M=40.97$, $SD=5.83$），父親の年齢：23-65 歳（$M=43.48$, $SD=6.47$）。母親の就労形態：フルタイム 263 人（20.3%），パートタイム 389 人（30.1%），フリーランス 24 人（1.9%），未就労 618 人（47.8%）。結婚歴：2-32 年（$M=12.91$, $SD=5.64$）。家族形態：核家族 958 人（74.0%），多世代同居家族 336 人（26.0%）。子どもの人数：1 人は 422 人（32.6%），2 人は 710 人（54.9%），3 人は 140 人（10.8%），4 人は 21 人（1.6%）であった。

Ⅲ. 結　　果

各変数の記述統計と相関を**表 1** に示した。

すでに述べたように，本研究では父親の育児環境に着目し父親の回答する子どもの問題行動が父親の育児行動につながる直接経路と，母親が回答する子どもの問題行動が父母間のコペアレンティング調整を媒介して，父親の育児行動につながる経路を検証した。そのため，子どもの問題行動に対する回答を父親と母親に分けて潜在変数を設定し両者に共分散を想定した。相関係数の値からすれば外在化問題行動，内在化問題行動ごとに潜在変数とするモデルも考えられたが，本研究の目的に沿って父母別とした。また，間接経路における夫婦ペアレンティング調整尺度の父母回答も，母親項目は「夫に対してどれくらい行うか」，父親項目は「妻はあなたに対してどれくらい行うか」というように，行動の送り手（母親）と受け手（父親）双方からの回答を得ていることから相関が高かった。本研究では夫婦のペアのデータを用いたため，夫婦間のコペアレンティング関係が反映されているとみなし，いずれにも潜在変数を設定した。以上を踏まえて，仮説モデルを想定した（**図 1**）。

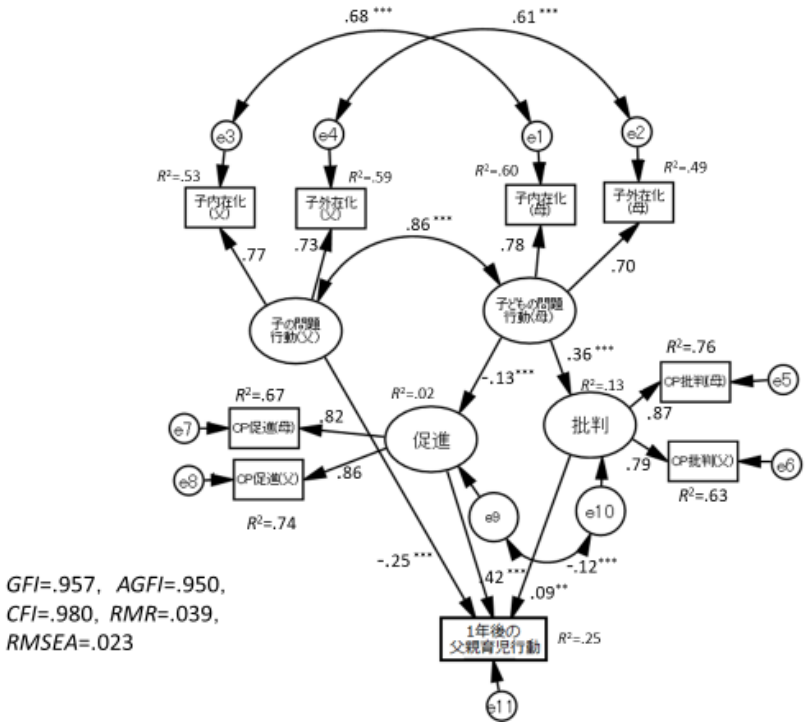
仮説モデルについて，IBM SPSS® Amos27 を用いて適合度を算出したところ，$GFI=.990$, $AGFI=.976$, CFI

Presented by Medical*Online

表 1　各変数の記述統計と内的整合性，変数間相関

尺度（回答者）	平均値	SD	α	9）	8）	7）	6）	5）	4）	3）	2）
1）内在化傾向（父）	1.53	0.36	.78	− .18***	.20***	.01	.18***	− .02	.48***	.79***	.57***
2）外在化傾向（父）	1.67	0.35	.74	− .15***	.21***	− .07*	.21***	− .08**	.75***	.50***	
3）内在化傾向（母）	1.53	0.37	.77	− .16***	.22***	.02	.24***	− .02	.55***		
4）外在化傾向（母）	1.66	0.35	.74	− .13***	.19***	− .04	.22***	− .09**			
5）CP_ 促進（母）	3.90	0.93	.93	.39***	− .10***	.72***	− .08**				
6）CP_ 批判（母）	3.27	0.98	.91	− .05	.69***	− .14***					
7）CP_ 促進（父）	3.79	0.96	.93	.40***	− .09**						
8）CP_ 批判（父）	3.26	1.04	.91	− .04							
9）父親育児行動	4.46	0.90	.90								

$n=1{,}294$，$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$
注（母），（父）は，それぞれの尺度の回答者を，CP は母親による父親へのコペアレンティング調整行動を示す。



** $p<.01$, *** $p<.001$

注（母），(父)は，それぞれの尺度の回答者を，ＣＰは母親による父親へのコペアレンティング調整行動を示す。

図 1　父親の育児行動の縦断的モデル

=.992，χ^2（19）=59.601，$p<.001$，*AIC*=111.601，*BIC*=245.904，*RMR*=.009，*RMSEA*=.041 であり，モデルに適合していると考えた。

つぎに，対象が幅広い年齢集団にまたがっているため，確認として，年齢集団による多母集団での同時分析を行った。第一子の年齢による 4 群について配置の不変性を確認しパラメータ間の差の比較が有意であったパスや共分散に等値制約をかけたモデル，ならびに，集団間ですべての母数が等しいという制約をかけたモデルのそれぞれについて適合度を求めたところ，前者が *GFI*=.972，*AGFI*=.941，*CFI*=.984，χ^2（86）=166.619，$p<.001$，*AIC*=354.619，*RMR*=.024，*RMSEA*=.027 であり，後者は *GFI*=.957，*AGFI*=.950，*CFI*=.980，χ^2(154)=256.515，$p<.001$，*AIC*=308.515，*RMR*=.039，*RMSEA*=.023 であり，母集団間で因子パターン，因子の分散・共分散，観測変数の誤差分散のすべての母数が等しいモデルの適合度がよかった。そのため，これらのパスや共分散には母集団間に顕著な差はないものとみなした。全体として仮説モデルは，幅広い第一子の年齢に適用できることが示されたことから，以下，母集団間

Presented by Medical*Online

のすべての母数が等しい仮説モデルについて結果を見た。

標準化係数の値を見ると，父親回答の子どもの問題行動から父親の育児行動へは－.25（$p<.001$）と有意な負の影響がみられた。母親回答による子どもの問題行動から促進へは－.13（$p<.001$）と負の値で有意であり，批判へは.36（$p<.001$）の正の影響が有意であった。さらに，促進から翌年の父親の育児行動へは.42（$p<.001$）の正の影響がみられ，批判から父親の育児行動へのパスは.09（$p<.01$）であり1％水準で有意であった。また，子どもの問題行動に対する父母の共分散は.86（$p<.001$），促進と批判の誤差共分散は－.12（$p<.001$）であったほか，子どもの内在化問題行動，外在化問題行動の父母間における誤差の共分散も有意であった（内在化問題行動で.68，外在化問題行動で.61，ともに$p<.001$）。

Ⅳ．考　　察

本研究では，父親にとっての育児環境とは子どもと母親の存在であるととらえ，父親の回答する子どもの問題行動が1年後の父親の育児行動につながる直接経路と，母親の回答する子どもの問題行動が母親による父親の育児への批判や促進行動を介して1年後の父親の育児行動につながる間接経路を含めた仮説モデルの検討を行った。以下，採択された仮説モデルに基づき全体の傾向について考察した。

第一に，父親の認知する子どもの問題行動が1年後の父親の育児行動に与える直接的な影響では，問題行動が高く認知されるほど後の育児行動は低減した。目的の章で述べたように，母親に関しては対応困難な子どもの問題行動は，母親のストレスや負担感，否定的な感情に関連し，肯定的なかかわりの低減に及ぶことが懸念されている[5~7]。これに対して本研究では父親に着目し，父親の認知する子どもの問題行動の高さが1年後の父親の育児行動の低減につながる可能性を示した。

第二に，母親による父親への調整行動を介した間接的な経路をみると，母親が子どもの問題行動を高く認知するほど，母親から父親に対する批判は高かった。しかし，批判が1年後の父親の育児行動に与える影響は，極めて低い値であり安定した解釈を行うには限界があると考えた。一方，母親による父親の育児への促進は，1年後の父親の育児行動を高めていた。加藤・神谷[15]によると母親の回答による父親の育児への促進は，同時点で父親が回答する育児への関与の高さに関連する一方で，批判は有意な関連を示さなかったと報告している。本研究では，父親自身が認知する母親からの促進および批判の程度も含めて，母親による父親の育児への調整行動が父親の育児行動に与える影響を縦断的に検討した結果，母親の促進は，1年後の父親の育児行動を高める予測因子となることが確認されたと言える。

2つの経路を合わせて考えると，父親が子どもの問題行動を高く認知するほど1年後の父親の育児行動は低減するが，母親から父親の育児への促進が高ければその後の父親の育児行動は高まるかもしれない。しかし，母親の認知する子どもの問題行動と母親の促進の関係は，極めて低いながら負の関連であった。また，子どもの問題行動をとらえ負担に感じる母親の行動は，父親への批判に向きやすいが批判の高さによってその後の父親の育児行動が高まることは期待し難い。したがって，本結果からは，母親による子どもの問題行動の認知から母親の調整行動を経て父親の育児行動の増加につながる経路は示されなかった。

「健やか親子21（第2次）」[21]においては，育てにくさを感じる親に寄り添う支援が重点課題の一つとして掲げられている。夫婦による調和的なコペアレンティングは，通常の育児にはもちろんだが，育てにくい子どもの育児においてはより強く求められよう。そのために必要な父親の育児行動は，母親からの批判ではなく尊重や励ましによって増加していた。すなわち，父親の育児行動や夫婦によるコペアレンティングには，母親から支えられているという父親の主観的体験が重要と思われる。しかしながら，現状では，母親が子どもの問題行動を感じるほど父親に対する批判は増加しており，母親のひとり抱えが懸念される。子育ての困難から父親を批判する母親や，子どもの問題行動への対応から退行する父親など，夫婦間に生じるズレを緩和する方策が必要となろう。

Schoppe-Sullivan，Weldon，Cook ら[22]は，情動統制力の低い4歳児において，父母間に協力的なコペアレンティングがあれば1年後の外在化問題行動は低減されることを示した。すなわち，子どもの問題行動に対し父母が一体となり助け合いながら子育てに向き合うというコペアレンティングがあれば，子どもの問題行動が緩和される可能性が示唆されている。子どもの

Presented by Medical*Online

問題行動という子育ての課題が，本来はともに向き合うべき父母の関係にひずみやズレを招いたり，親子の交流や子どもの成長を損なうことのないよう，父母が協力的で質の高いコペアレンティングの関係を築くための家族システムを踏まえた支援が求められる。

先行研究では母親による父親の育児への促進と夫婦関係への満足の関連を指摘していることから[14]，今後は，夫婦関係が父母関係に与える影響も含め母親による父親の育児への促進行動の背景要因をより詳細に検討する必要がある。その際，本研究では家族の相互作用に限定した検討を行ったのに対して，家族システムを取り巻く地域ネットワークの影響に目を向けることも考えられよう。また，本研究では子どもの問題行動に焦点をあてたが，子どもから必要とされ求められる感覚や子どもに関わる楽しさなど，子育てのポジティブな側面を含め父親の育児行動への影響を検討することも今後の課題となる。

V．結　　論

父親にとっての育児環境として，父親の回答する子どもの行動と父母のコペアレンティングに向けた母親から父親への調整行動をとりあげ，父親の育児行動につながる 2 つの経路を含めた仮説モデルの縦断的検証を行った。経路は，①父親の認知する子どもの問題行動が 1 年後の父親の育児行動につながる経路と，②母親の認知する子どもの問題行動が母親による父親の育児への促進や批判を介して，1 年後の父親の育児行動につながる媒介経路であった。仮説モデルは概ね支持され，①の経路では，子どもの問題行動の高さは父親の育児行動を有意に低減した。②の経路では，母親の認知した子どもの問題行動の高さは母親から父親に対する批判の高さに関連した。また，母親による父親の育児への促進は，1 年後の父親の育児行動を高めることが示された。

本研究は，科学研究費基盤研究（B）（24330191），基盤研究（C）（17K04338）の助成を受けて実施した。本論文の一部は，日本発達心理学会第 30 回大会で発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文　　献

1）Lansford JE, Laird RD, Pettit GS, et al. Mothers' and fathers' autonomy-relevant parenting: longitudinal links with adolescents' externalizing and internalizing behavior. Journal of Adolescence 2014; 43: 1877-1889.

2）Rinaldi CM, Howe N. Mothers' and fathers' parenting styles and associations with toddlers' externalizing, internalizing, and adaptive behaviors. Early Childhood Research Quarterly 2012; 27(2): 266-273.

3）Zvara BJ, Sheppard KW, Cox M. Bidirectional effects between parenting sensitivity and child behavior: a cross-lagged analysis across middle childhood and adolescence. Journal of Family Psychology 2018; 32 (4): 484-495.

4）Belsky J. The determinants of parenting: a process model. Child Development 1984; 55: 83-96.

5）平田祐太郎．養育者および保育者における子どもの問題行動の捉え方と養育者の育児負担感の関連．九州大学心理学研究　2011; 12: 79-85.

6）種子田　綾，桐野匡史，矢嶋裕樹，他．障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係．東京保健科学学会誌　2004; 7(2): 79-87.

7）中島俊思，岡田　涼，松岡弥玲，他．発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴．発達心理学研究　2012; 23(3): 264-275.

8）Gordon I, Feldman R. Synchrony in the triad: a microlevel process model of coparenting and parent-child interactions. Family Process 2008; 47: 465-479.

9）Davis EF, Schoppe-Sullivan SJ, Mangelsdorf SC, et al. The role of infant temperament in stability and change in coparenting across the first year of life. Parenting: Science and Practice 2009; 9: 143-159.

10）Feinberg ME. The internal structure and ecological context of coparenting: a framework for research and intervention. Parenting: Science and Practice 2003; 3: 95-131.

11）McHale JP, Lindahl KM. Coparenting: a conceptual and clinical examination of family systems. Washington, DC : American Psychological Association, 2011.

12）Cook JC, Schoppe-Sullivan SJ, Buckley CK, et al. Are some children harder to coparent than others? children's negative emotionality and coparenting relationship quality. Journal of Family Psychology 2009; 23: 606-610.

13）Jia R, Schoppe-Sullivan SJ. Relations between

Presented by Medical*Online

coparenting and father involvement in families with preschool-age children. Developmental Psychology 2011; 47: 106-118.
14）加藤道代，黒澤　泰，神谷哲司．夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討．心理学研究　2014; 84: 566-575.
15）加藤道代，神谷哲司．幼児期から青年期までの子どもの外在化傾向と夫婦ペアレンティングの関連．小児保健研究　2017; 76(6): 637-643.
16）厚生労働省子ども家庭局母子保健課．“Strengths and Difficulties Questionnaire”．https://www.mhlw.go.jp/-bunya/kodomo/boshi-hoken07/h7_04d.html（参照 2022.11.12）
17）Goodman R, Scott S. Comparing the Strengths and Difficulties Questionnaire and the Child Behavior Checklist: is small beautiful?. Journal of Abnormal Child Psychology 1999; 27(1): 17-24.
18）Matsuishi T, Nagano M, Araki Y, et al. Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): a study of infant and school children in community samples. Brain Development 2008; 30(6): 410-415.
19）平田裕美．青年期前期の子どもに対する父親のかかわり―分類と特性―. 家族心理学研究　2003; 17(1): 35-54.
20）森下葉子．父親になることによる発達とそれに関わる要因．発達心理学研究　2006; 17(2): 182-192.
21）厚生労働省子ども家庭局母子保健課．“健やか親子 21（第二次）”．2015.　https://sukoyaka21.mhlw.go.jp/about/growth-sukoyaka21/（参照 2022.11.12）
22）Schoppe-Sullivan SJ, Weldon AH, Cook JC, et al. Coparenting behavior moderates longitudinal relations between effortful control and preschool children's externalizing behavior. Journal of Child Psychology and Psychiatry 2009; 50: 698-706.

〔Summary〕

The purpose of this study was to examine the effects of children's behavioural problems and mothers' coparental regulation on fathers' self-reported involvement in childcare one year later. The quality of the mothers' coparenting was measured by their encouragement and criticism of the fathers' parenting. We hired monitors who registered with a web-based survey system and asked them to complete a questionnaire. Participants were 1,294 sets of couples (mothers and fathers) whose eldest child was between 2 and 17 years old. The data was dyadic. Covariance structural analysis indicated that the effect of children's behavioural problems, as perceived by the fathers, significantly reduced the fathers' involvement after one year. Meanwhile, children's behavioural problems, as perceived by the mothers, increased mothers' criticisms of fathers, while criticism had an extremely low impact on fathers' self-reported involvement one year later. On the other hand, mothers' encouragement of fathers, which was slightly associated with the children's behavioural problems, as perceived by the mother, increased the fathers' involvement one year later. Future research needs to examine the factors related to mothers' encouragement of the fathers. These findings suggest that mothers' encouragement has a supportive effect on harmonious coparenting, while mothers' criticism does not necessarily motivate fathers to be more involved. Support for parents who find it hard to raise children needs to be provided as comprehensive family support based on the dynamics of child-rearing families.

Key words: child rearing, marital couples, coparenting, children's behavioural problems, family system

Presented by Medical*Online